

更紗と17・18世紀カタルーニャ

奥野, 良知

(出版者 / Publisher)

法政大学国際文化学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

異文化 / 異文化

(巻 / Volume)

2

(開始ページ / Start Page)

215

(終了ページ / End Page)

232

(発行年 / Year)

2001-04-01

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00004523>

更紗と17・18世紀カタルーニャ*

Les Indianes i la Catalunya dels Segles XVII i XVIII

奥野 良知

はじめに

ウオーラストインは、スペインを半辺境と位置づけている¹。わざわざウオーラストインを持ち出さなくとも、スペインといえ、工業化とはあまり縁のない原材料供給国というイメージが日本では強い。しかし、カスティーリャ王国とは異なり、カタルーニャ公国は、18世紀になると急激な経済発展をとげながらスペイン唯一の綿業地域となり、「小さなイングランド」と形容されるようになった²。さらに19世紀になると、綿工業を主導部門として、スペインでは唯一、他の西欧先進諸地域に匹敵する工業化を達成し、その綿布生産量は19世紀末にオランダ、ベルギー、イタリア、日本、ポーランドを上回っていた³。

ところで、ウオーラストインは、カタルーニャが工業化したことを知らないわけではない。しかし、それについて彼は、「カタルーニャの辿った道は複雑で、のちにそこで工業が発展したことは、この巻の対象外である」と記すに留まっている。確かにカタルーニャの工業化過程は複雑で特異な面が多く、カタルーニャ経済史の大家ジョルディ・ナダルも、「研究が進めば進むほど、カタルーニャの工業化は複雑な経路を辿ったことが明らかになる」と述べている⁴。

しかし、カタルーニャに特殊な点のみをことさらに強調しても、カタルーニャの工業化の要因がより明らかになる訳ではない。カタルーニャの工業化で主導部門の役割を果たしたのは綿業なのであり、この点は他の西欧先進諸地域と同じなのだから、むしろ重要なことは、カタルーニャの工業化を、当時の世界経済の枠組みのなかに置き直して、どのような状況下でカタルーニャに綿業が生じ、何がカタルーニャの工業化において特殊で、何が他の先進諸地域と類似していたのかを考察し直すことだと思われる。そして、このような方法こそが、な

ぜカタルーニャに綿業が生成したのか、なぜスペインではカタルーニャだけだったのか、という問題を明らかにしてくれるであろう。

本稿では、このような問題関心から、17・18世紀を中心にカタルーニャ綿業についてのささやかな再考察を行う。その際、綿織物、より正確には更紗（捺染綿布）が当時のカタルーニャを含むヨーロッパで持っていた文化的側面について特に留意していく。というのも、従来のプロト工業化期を含むの織物業の研究では、生産構造の側面に比べて、産業集積、地域的経営資源、業種転換能力、とりわけそれぞれの織物がもっていた文化的意味や流行などについての比重が低かったと思われるからである⁵。

1. カタルーニャにとっての更紗(インディアーナス)

スペインで唯一の綿業地域だったカタルーニャで生産されていた綿布とは、更紗、つまり捺染綿布だった。カタルーニャ産綿布が捺染された綿布だったことは何も特別なことではなく、18世紀にヨーロッパのいくつかの地域で生産が本格的に始まった綿布は、その多くが最終的に捺染されて販売された。ポール・ルイヨはアルザスに関して「綿紡績業および綿織業が生まれ発展したのは、捺染業の力によるものであり、また捺染業のためにであった」といっているが、これはほとんどの近代ヨーロッパ綿業に当てはまる⁶。

ところで、更紗がカタルーニャ語でインディアーナスindianesと呼ばれ、他の言語においても例えばカスティール語=スペイン語indianas、フランス語indiennes、英語calico（インドの都市Calicutより）と呼ばれたように、この織物はインドに起源があった。では、なぜインド産品の更紗がヨーロッパで生産されるようになったのだろうか。その理由は、17・18世紀ヨーロッパの中産階級のあいだに「舶来趣味」、特に「東洋趣味」が盛り上がり、インドの更紗、中国の磁器、日本の漆器といった東洋産品が大流行したことにある。

バーグは「東洋を造る。東洋物産とヨーロッパ工業、1500 - 1800年」という論文で、それを次のように説明している。アジアの奢侈品は、すでに古代ローマに溢れていたが、中・近世になると、東洋は西洋にとっての「他者」と明確にイメージされていく。そして、「他者」であるがゆえにその産品は、異国風（エキゾチック）で、未知で新奇で異様で、希少な輸入品だった。ゆえに、それは明確な奢侈品とみなされ、上流階級のあいだで収集された。

しかし、17世紀になると大きな変化が生じ、先に記したインドの捺染綿布、中国の磁器、そして日本の漆器が大量に輸入されるようになる。これらの産品はやはり奢侈品ではあった

が、以前のような一握りの上流階級のためだけの奢侈品ではなかった。それらは、様々な模様で彩られその幅広い質と価格ゆえに、中産階級も、否むしろ中産階級こそが熱狂的に渴望する高品質の「半奢侈品」だったのである⁷。

中産階級がそれらの「半奢侈品」の東洋産品を競って求めた理由を、イギリスについて川北氏は次のように説明している。17世紀になると、「ジェントルマンがジェントルマンと認められるのは、血筋のためというよりは、ジェントルマンらしい生活をしていることである」という風潮が広まっていった。つまり「身分ではなく富の力が『流行とないまぜになった贅沢』などを媒介項として、人びとのステイタスを決定する傾向がどんどん進行して」いった。つまり、「流行を追うこと」は、やらなければ「恥ずかしいステイタス・シンボルになった」のである。ある舶来品が王室で使われると、貴族やジェントリーのあいだで必ず流行し、より下層の人々は、舶来品を模造したより安価な国産商品を求めるようになっていった。このような「見栄のための消費」は、あらゆる階層に広まっていった⁸。だが、このような現象はイギリスに限らず、バグのいうように多かれ少なかれヨーロッパに共通の現象だった⁹。

東洋産の「半奢侈品」のなかで、とりわけインド産更紗が輸入量の点でも後の工業化との関係においても最も重要だった。インド産更紗は、17世紀にヨーロッパ各国の東インド会社によって輸入され、急速に流行し、その現象はイギリスでは「インド狂い」とまで呼ばれるようになる。

綿布はまず軽かった。この点は、軽量繊維が好まれていた時代背景に合った。また、虫に食われにくく洗濯も容易だったため、他の繊維に比べて清潔だった。さらに、何ととっても色鮮やかな様々な模様が捺染してあり、十分に「東洋的」で異国情緒に満ちていた。

更紗を普及させるため、東インド会社はマーケティングも行った。すでに、16世紀のヨーロッパでは、ヨーロッパ人にとっての「東洋的」美のイメージが形成され普及していた。そこで、イギリスの東インド会社は、ヨーロッパ人の好む更紗のデザインや色について、インドの製造業者に細かい指示を出していた。さらに、東インド会社は、市場開拓作戦として王室や最上流貴族に綿製品を寄贈したりもした。王室でそれが使われれば、貴族やジェントリーのあいだで必ず流行し、さらに上流市民にまで広まるからだった。インド産捺染綿布はまずベットカバーや食卓布に使われ、カーテンや掛け布としても大成功した。さらに1680年代にはオランダでもイギリスでも上流階級の衣服に用いられるようになっていく。

このように、更紗は室内装飾、調度品、衣服とさまざまな用途に使用されるようになり、絹織物、亜麻織物、麻織物、毛織物など当時のヨーロッパ在来の織物業に大きな打撃を与え

ていった。更紗は、ヨーロッパの消費者行動を大きく変化させ、消費・生活・衣料の革命、「更紗革命」を引き起こしたのである。さらに、それはヨーロッパの製造業者たちにその模造品の製造を誘発させ、消費者の需要に基づいた工業化（＝産業革命）をヨーロッパに引き起こすことになっていく。要するに、「産業の革命」の前にはまず「消費の革命」が、言い換えれば、「プロセスのイノベーション」の前にはまず「プロダクトのイノベーション」があったのである¹⁰。

以上のことは、カタルーニャにも当てはまる。ただし、イギリスやオランダでは、更紗は東インド会社によってインドから喜望峰ルートで輸入されたのに対し、カタルーニャへは主にマルセイユやイタリアのリヴォルノを経由して、レヴァントからインド産更紗やレヴァント産の模造更紗がもたらされた¹¹。古代中世より、レヴァントは東洋と西洋を結ぶ結節点として重要な役割を果たしており、喜望峰航路が発見されて以後もその重要性は急激に色褪せるようなものではなかった。

レヴァントでは、更紗の重要生産地の一つだった西北インドとレヴァントの貿易の中樞を握っていたアルメニア人によって、インド産更紗の本格的な模造＝輸入代替が行われ、更紗生産が大規模に行なわれていた。レヴァント産更紗は17世紀にアレppoからマルセイユに大量に輸出され、プロヴァンスからラングドックに至る地中海側フランスで消費された。またカタルーニャを中心とする地中海側スペインやイタリアに再輸出もされていた。つまり、地中海ヨーロッパには、西北ヨーロッパとは異なる更紗輸入ルートがあったのである。

また、レヴァント産の青綿布（青色に染色された綿布）は、更紗に負けず劣らず重要な輸入品だった。この綿布はカタルーニャでは、カタルーニャ語のblau（青）に由来するブラベッツ（blavets）・ブラウエッツ（blauets）という名で呼ばれた。これは、アレppoで生産されたもので、地中海側フランスやカタルーニャで女性の前掛けやスカートの裏地、水夫や職人の夏服に利用された¹²。

1577年、1600年、そして1630年代の史料によると、カタルーニャ公国の首都であるバルセローナ（バルセローナ）には、インド産更紗（calicuts）やキルティングされたペルシアとアレクサンドリア産の更紗（indianes）、ペルシア産更紗（indianes）の室内用上着、ペルシア産更紗のベットカバー、女性用白綿布（bombasi）、アレppo産を中心とする綿糸、アッコ（アルク）産やイズミル産の綿花、そしてレヴァント産の青綿布などが輸入されている。このように、17世紀前半では、更紗が少なくとも胴着やベットカバーに用いられていたことがわかる。約1世紀後の1732年にカタルーニャで行われた調査では、更紗の用途として最

も多いものは、子供用上着 (cota) または室内着 (bata) で、紳士・婦人用のそれ、帽子、ベットカバー、子供用のチュニカ (túnica: 腰下までくる上着)、成人用のそれと続いている。このような更紗の用途は、他のヨーロッパ先進諸地域と大差ない。

ただし、バルサローナには中世から船の帆に用いるため厚手無地綿布 (cotonia) の織布工 (cotoner, fustaner) が存在し、これを保護するために、カタルーニャ公国政府が散発的に綿布輸入を禁止したため、カタルーニャでの「更紗革命」は、他の先進諸地域よりも緩慢になった可能性は否定できない¹³。

しかしながら、17世紀を通して更紗の輸入は増加し続け、17世紀末の1695 - 96年には、17,000カーナ (約27,000メートル) の更紗がバルサローナに輸入されている。また、この時期には、模造生産=輸入代替がすでに始まっていたヨーロッパの諸地域から、白地綿布や着色綿布なども輸入されている。実際、この時期のバルサローナにおける織物小売商、フランス人商人、カタルーニャ人貿易商らの在庫目録には、多数の更紗や青綿布が記載されている。つまり、17世紀の末のカタルーニャでは、すでに輸入更紗の市場が着実に形成されていたといえる¹⁴。

その背景には、当時のカタルーニャ経済が急速に発展し始めていたことがある。カタルーニャでは、1680年代に、北西ヨーロッパ向けの葡萄蒸留酒生産と葡萄栽培業が南東部で急速に発展し始めていた。葡萄蒸留酒は北西ヨーロッパで強い需要があり、オランダ人がそれを南西フランスのシャラントから輸入していたが、オランダ・フランス間の通商関係が悪化したことで、オランダ商人から穀物を輸入していたカタルーニャがその代替地となっていった。これが引き金となって、カタルーニャでは農業の特化が進行しながら経済発展と人口増加が生じていたのである¹⁵。

2. 更紗の輸入代替過程

輸出入集配機能をもつヨーロッパのいくつかの重要都市では、17世紀後半にすでにインド産やレヴァント産の輸入綿布を用いて、更紗の模造捺染が開始されていた (マルセイユ1648年、ロンドンとアムステルダム1676年)。初期の捺染技術はまだ未熟なものだったが、模造更紗は「舶来」更紗に手が出ない階層の需要を満たしていった。ちなみに、深沢氏によると、マルセイユとアムステルダムには、アルメニア人が多数居住しており、捺染技術の移転に大きな役割を果たした。

また、フランスでは、1685年のナントの勅令の廃止により多数の新教徒捺染業者がマルセイユなどから国外に逃亡し、ドイツ、スイス、イタリアのリヴォルノなどに捺染技術を広めた。しかし、マルセイユとカタルーニャの緊密な関係もかかわらず、ユグノー捺染業者がカタルーニャに来た明確な形跡はない。これは、スペインのカトリック政策が関係しているものと思われる¹⁶。

ところで、17世紀末のカタルーニャには、更紗市場が明確に形成されていたにもかかわらず、この時点ではまだ更紗の捺染は行われていない。当時の開明的商人ナルシス・ファリウ・ダ・ラ・ペーニャは同志とともに、バルサローナの在来織物業（絹、亜麻、毛）への新技術移転計画を立てているが、そこでは更紗製造の技術移転についてまったく触れられていない。これは、在来の織物業界にとって、すでに綿織物が恐るべき競争相手となっていて、更紗の技術移転に拒絶反応を示したためだったと考えられる。1667年に、バルサローナの絹織布工ギルドが、「これほどに多くの捺染され染色された綿布を織物小売店が販売しているのは驚くべきことであり、以前はタフタで行われていた裏打ちも、今ではそれらの綿布で行われている」と非難している¹⁷。

しかし、1712年には、バルサローナに定住していたフランス人ピエール・ジャケとカタルーニャ人ジュアン・リウスの2人の仕立職人兼再販業者（*sastre i revenedor*）によって、輸入綿布を用いた更紗生産が行なわれている。この時期は、スペイン継承戦争（1701 - 1714年）の最中で、ハプスブルクを支持するカタルーニャ公国は、カスティーリャ・フランスのブルボン連合と交戦状態にあった。このためマルセイユとの交易が悪化し、カタルーニャにおける輸入更紗の在庫が減少していたことがその誘因になったと思われる。仕立職人は日常的に顧客が仕立を依頼する際に持ち込む織物の流行を熟知しており、しかも、しばしば彼らは再販小売り業者を兼ねていたことから、輸入綿布の捺染に彼らが手を出すことは不思議なことではなかった¹⁸。

さて、フランスや特にイギリスでは、更紗の流行に対する在来織物業界（絹、亜麻、毛）の強い反撥により、フランスでは1686年にインド更紗の輸入と捺染綿布製造の使用禁止、1691年に綿モスリンと白地綿布の輸入禁止、イギリスでは、1700年にインド産更紗輸入禁止、そして1720年に更紗の使用が禁止される。

これらの禁止法は、その予期せぬ結果として、更紗の代用品としての亜麻との交織綿布に国内市場を保証する保護主義立法の役割を果たした。これによって、亜麻綿交織物の生産が盛んになり、特にイギリスにおいては、ファスティアン（*fustian*）と呼ばれた交織物の生産が

ランカシャーで急激に発展したことは周知のところである。これに対し、オランダやスイスでは上記のような禁止令は出ず、ヨーロッパの更紗捺染業の中心地となっていく¹⁹。

ただし、次の2点は注意すべきであろう。まず、イギリスでは、ファスティアンは更紗の代用品であったから、それは更紗調に捺染されて販売されたことだ²⁰。次に、綿の紡績と織布には、在来織物業の技術がそのまま適応できたため、両工程の輸入代替地は、在来織物業があらかじめ集積している地域だったことだ。例えばランカシャー、ノルマンディー、フランス側フランドル、ラングドックなどは、いずれも毛織物業や亜麻・麻織物業が綿業に転換している²¹。

いずれにせよ、ここで問題となるのは、スペイン政府の対応である。1714年のスペイン継承戦争の終結によりスペインは、多様な国からなる同君連合から、カスティーリャのマドリールを中心としたブルボン朝統一国家となった。この新政府は、なんと初めから更紗の輸入代替を明確に意図した法令を出していく。しかも、それは、ペストの感染源とみなされた小アジアからの伝染を防ぐために、レヴァント経由やレヴァント産の綿関連産品の輸入を禁止することによってカタルーニャに更紗の輸入代替を促すというもので、公衆衛生政策を装った保護主義政策だった。

まず、1716 - 18年にインド産更紗の輸入が禁止され、1720年には、マルセイユでのペストの発生を理由にレヴァント産綿花の輸入が禁止され、1724年にはレヴァント産綿布の輸入が禁止される。しかし、レヴァント産綿布は、オランダ、イギリス、フランスで生産された模造更紗に混入されて密輸されたので、まったく効果がなかった。このため、1728年には、ヨーロッパ産の模造更紗と捺染亜麻布の輸入が禁止される²²。

レヴァント産綿花の輸入を禁止するという政策は、ヨーロッパではかなり異例のことだと思われる。というのも、当時のレヴァントは綿花の大栽培地で、その綿花は、フランス、スイス、ドイツを中心として多くのヨーロッパ諸地域に輸出され、インドとの関係の深いイギリスですら、初期の段階では輸送費の点から原綿の多くをレヴァントから輸入していたからである²³。

そして、さらに興味深いことに、レヴァント綿花の輸入を禁止する代わりに、政府は同1728年にマルタ島産綿糸の輸入を許可し、またマルタ産以外のあらゆる綿糸の輸入を禁止することで、捺染だけでなく織布工程も速やかに輸入代替されることを望んだ。マルタが選ばれた理由は、スペイン政府がマルタ島のマルタ騎士団（＝洗礼者ヨハネ騎士団）に、オスマン帝国からのカトリック防衛の同盟者として、レヴァントからスペインへペストが伝染する

のを防ぐ役割を担わせたことにある。つまり、マルタは、ブルボン朝スペインの公衆衛生政策の要だったのである。

マルタ産綿糸とは、表向きには、マルタ島で栽培された綿花を同島で紡績したものだった。マルタの綿花ではなく綿糸が輸入された要因は明らかでないが、マルタ産業の保護育成という観点からスペイン政府とマルタ騎士団のあいだで採られた妥協策だった可能性は高い²⁴。

スペイン継承戦争終結後の1714年から1728年までの時期は、先に述べた仕立職人・再販小売業者による輸入綿布の捺染が継続して行われていた。だが、1728年の法律を受けて、この年以降バルサローナでは、織物小売商 (botiguer、特に更紗を扱っていた亜麻織物小売商 botiguer de telesや上級小間物商 mercer) を中心とする商人と在来の織物職人 (絹など) がパートナーシップ (Companyia) を組んで、更紗の模造生産に参加してくる。すでに17世紀から、織物小売商は単に小売りをするだけでなく、更紗や青綿布などの織物輸入も手がけていた。また、名門貿易商たちの多くが、スペイン継承戦争の最中に没落していたこともあり、資本、知識、情報の面で彼ら織物小売商こそが更紗の模造生産に最も適した立場にいたのである。ここに、仕立職人が中心だった更紗捺染は、新たな段階に入った²⁵。

このような捺染企業は、1730年にはすでにかなり存在しており、それは、同年に地方監察官サルティーネが、1728年法の目的は、「カタルーニャ公国に新たな企業の設立を促すとともに、すでにこの公国で操業を始めている企業をさらに繁栄させ増加させることにある」と述べていることや、同じく同年、バルサローナ公衆衛生評議会が、織物小売店に対する密輸更紗調査の際に「この市 (バルサローナ) ですでに生産されている更紗と青綿布」を誤って密輸品と混同しないよう注意を促していることから裏付けられる²⁶。この密輸更紗調査は、同年と1732年に行われており、それによると、カタルーニャに多数の密輸更紗が存在し、バルサローナ以外では南東部に多いことが分かる。これは、17世紀末に生じた南東部の葡萄栽培と蒸留酒製造業の発展が、1730年代には継承戦争の痛手から急回復し、カタルーニャ経済全体の経済発展の機動力となっていたためだった²⁷。

1730年前後の捺染企業の生産構造について、織布については詳細は不明だが、捺染は問屋制 (原料前渡しの外注) で行われていた。しかし、1730年代後半になると、捺染と織布は同一企業の下に垂直統合され、しかも同じ建物に集中されるようになる。このような捺染と織布を統合した集中作業所 (マニファクチュアー) は、更紗「工場」(fàbrica d'indianes) と呼ばれ、以後バルサローナで急増していく。捺染工程が集中作業所方式 (内製方式) で行われたこと自体は、品質・労働者管理、各作業の一元的管理、規模の経済、技術に関する機密

保持などの点から、ヨーロッパではかなり通常のことだった。

だが、織布工程が集中化され、しかもそれが同一作業所内で捺染と垂直統合されていたことは、内部組織化のコストの点から多少異例のことといえる。品質管理の点以外で同一作業所内に垂直統合された理由としては、まず、免税特権の取得条件に織機12台以上の保有が義務づけられていたことが挙げられる。外国産密輸更紗の横行する当時は、それに対抗するために免税特権を取得することは非常に重要なことだった²⁸。また、違法である密輸綿布の捺染は行なっておらず、政府の意図通りにマルタ綿糸の織布を行なっていることを示すためのカムフラージュの必要もあったと思われる。

というのも、綿布の輸入禁止にもかかわらず、この時期の更紗製造業者の捺染は、密輸綿布の捺染を中心に行われていたからである。ヨーロッパに熱病の如く流行していたのは単なる無漂白や白地の綿布ではなく、それは捺染されていた更紗で、それゆえ、その輸入代替を図る者にとって捺染工程こそが最大関心事だったこと、しかも、この時期のマルタ綿糸の供給量が少なく、そのうえ質も粗悪で染料が上手く着色しなかったことなどを考慮すれば、企業のこのような行動は理解できないものではない。

密輸品のなかで、レヴァント産青綿布の量は、捺染用のレヴァント産白地綿布を上回っていた。綿布は、マルセイユ経由でフランスの漁船に積まれ、夜半にカタルーニャの海岸に陸揚げされていた。青綿布はカタルーニャの女性に大変人気があり、しかも密輸綿布のなかで最も安かった。バルサローナの公衆衛生評議会ですら、そのあまりの需要の多さに密輸の根絶は不可能だと述べている。また、フランスでは1691年以降外国産更紗と綿布の輸入が禁止されていたが、「自由」港のマルセイユには、1703年からレヴァント産綿布の輸入が認められ、カタルーニャはレヴァント産青綿布の重要な再輸出先になっていたという事情もあった。ここで重要なことは、青綿布が実は、青地に白模様の更紗の材料として更紗製造業者に利用されていたことである。そこで政府は従来の方針をやや変更し、関税収入増加の意図で普及品である青綿布に関してのみ、1742年から30パーセントの関税で散発的に輸入を許可していく。

他方、マルタ綿糸の質が粗悪だったのは、マルタ商人の中に実際にはレヴァント産綿花を混入したり、レヴァント産綿糸をマルタ産綿糸と称して再輸出する者が多く、しかも、そのレヴァント産綿花や綿糸は、他のヨーロッパ諸地域には輸出できないような低級品だったためだった。そのうえ、マルタ綿糸の価格は決して安くなかった²⁹。

しかし、1760年代になると、マルタ綿糸の質が安定し供給量も増え、価格も妥当なところ

まで下がり、さらに信用買いができたこともあって、密輸綿布の捺染は減少していく。実際、マルセイユからスペインへのレヴァント産綿布の再輸出はこの時期に激減している³⁰。このため、織布工程も更紗「工場」内での重要性を高めていく。ところで、更紗「工場」で雇われていた織布工たちは、絹織布工や亜麻織布工などのバルサローナに在来の織物業の織布工だった。綿の織布と紡績に関しては、ヨーロッパ在来の技術がそのまま適応されたことは先に述べた通りである。また、1730 - 40年代には、更紗製造業者は、マルセイユを中心とするヨーロッパの代表的な更紗捺染産地から捺染工を招聘し、捺染技術の移転が行われているが、以後その技術は、「更紗」工場で雇われていた絹染色工などに受け継がれていく³¹。

これ以後のことに関しては、すでに別稿で触れてあるので、ごく簡単に記すのみとする。まず、スペイン政府は、18世紀後半のカルロス3世の治世（1759 - 1788年）になると、戦費調達のための関税収入の増加や、栽培開始間もない西領アメリカ植民地の綿花の使用促進を目的として、更紗を含む綿布の輸入解禁やマルタ綿糸への課税などの措置を断続的に行なうようになる。政府は公衆衛生政策としての保護主義的政策から、保護主義政策と関税収入増加政策のあいだを大きく揺れ動くようになったのである。また、事実上、独占的に綿糸を供給していたマルタ商人も、断続的に綿糸価格の釣り上げを行うようになってきた。このような取引費用の上昇を押えるためには、植民地産綿花を用いて紡績工程を輸入代替（内部化）し、質の良い綿糸を大量に生産することで更紗の品質を向上させるとともに、マルタ商人への依存を減らすことが必要となってきた。

紡績工程の導入は1760 - 70年代に断続的に行なわれるが、本格化するのはマルタ綿糸が高騰し、植民地産綿花の生産量と質が安定した1780年代になってからだった。この時期になると、毛織物業が集積していたカタルーニャの中北部農村地域で、毛織物業者たちがその間屋制家内工業のネットワークや情報集集能力を中心とする経営資源を用いて、綿の紡績・織物業への転換を急速に行っていく。ここでも、在来の技術と産業集積は十分に活用される。また、「プロセスのイノベーション」も始まり、ジェニー紡績機が1780年代半ばに導入され、1792年に農村ベルガで開発された改良型ジェニー（バルガダーナ紡績機）とともに中北部農村に広く普及し、さらそこでは1790年頃より水力紡績機を用いた紡績工場が、バルサローナではジェニー・バルガダーナやミュール（1803年に導入）を用いた馬力巻上げ紡績工場が設立されていく。こうして18世紀の末年までには、事実上綿糸生産の国産化が完了するとともに、バルサローナを中心として中北部農村地域にまで広がる「集合工場」もほぼ形成された。その後、ナポレオン治下のフランスとのフランス人戦争（スペイン独立戦争1808 - 14年）に

よる中断はあるものの、戦後、綿業は比較的すみやかに回復し、1830 - 40年代には本格的な工業化が始まる。こうして「プロセスのイノベーション」は最終局面に入っていく³²。

結びに代えて

綿業は、カタルーニャにおいても他のヨーロッパ先進諸地域同様に、17世紀に始まる中産階級の「舶来趣味」、とりわけ東洋趣味のうねりのなかで、「半奢侈品」のインド産更紗が熱病の如く流行し、「更紗革命」という消費革命、換言すれば「プロダクトのイノベーション」が生じたことに起源をもつ。そして、カタルーニャの場合は、マルセイユを中心とする地中海側フランスやイタリアと同様に、西地中海文化・交易圏の一員として、インド産更紗を模造したレヴァント産更紗の影響も強く受けた。

インド・レヴァント更紗の急激な流行によって、更紗を輸入・消費・再輸出していたヨーロッパの主要な交易都市では、インド・レヴァント産の輸入綿布を用いた更紗の模造生産が始まる。捺染工程の輸入代替に次いで、織布・紡績両工程の輸入代替も、都市や農村の在来織物業の産業集積と技術が利用されながら進行していった。カタルーニャ綿業もまったく同じ流れをたどったことは、すでに見た通りである。このようなヨーロッパに共通の流れを押えていなければ、ヨーロッパの綿業諸地域の比較研究は、実り豊かなものにはなり得ないであろう。

ただし、インド・レヴァント産更紗をめぐる各国政府の政策の違いにより、織布と紡績の輸入代替過程にはかなりの差がみられた。ブルボン朝スペインの場合、その政策は公衆衛生政策を装いながら、最初から更紗の輸入代替を意図していた点が特徴だった。

以上のことから、インド・レヴァント産更紗の輸入代替により製造されたヨーロッパ産更紗の市場が、17・18世紀においてはまずもってヨーロッパそのものだったことは当然であろう。イギリス産更紗が更紗の本家インドとその筆頭分家（「近東のインド」）たるレヴァントの市場を逆に席捲し始めるのは、ようやく1810年代になってからのことである³³。カタルーニャ産更紗も、そもそもそれは、当地に氾濫していたインド・レヴァント産更紗を輸入代替したものだったから、その最大の市場は、輸入代替初期の段階ではカタルーニャであったことはほとんど議論の余地はない。

しかし、狭いカタルーニャだけを市場とし続けていたなら、「小さなイングランド」と呼ばれるような工業化は起きなかつただろう。それには、新たなより広い市場が必要だった。

この点は、カタルーニャで激しい論争の種となってきた。つまり、その新しい市場とは西領アメリカ植民地だったのか、それともスペイン国内市場だったのかという問題である。だが、近年の諸研究の成果では、カタルーニャ産更紗の新たな市場の大半はスペイン国内市場だった、つまりその新たな消費者のほとんどはカタルーニャ以外のスペイン人だったことがわかっている。このことは、ヨーロッパにおいてヨーロッパ産模造更紗がもっていた文化的意味を考えれば、うなづける結果であろう。18世紀第四四半期に至っても、植民地へのカタルーニャ更紗の輸出は少なく見積もって更紗総生産量の7・15%、多めに見積もっても30%を超えるものではなかった³⁴。

すでに18世紀半ば、カタルーニャ産更紗にとって、購買力の高い大土地所有者が多いアンダルシアはかなり重要な市場となっていた。また、バルサローナの更紗製造業者は、同じ時期にカスティーリャの市場開拓を促進するため、王室に更紗を贈呈してそれを貴族や中産階級に一層流行させようとしている³⁵。そのかいもあって、1780年代には更紗はスペイン国内市場で劇的に普及し、生産が需要に追いつかなかったことが、当時のさまざまな証言から確認される³⁶。

ところで、かつてカタルーニャ産更紗の市場として植民地が過大に評価された背景には、歴史家のあいだで、18世紀のスペインでは道路が粗悪で国内流通網が遅れていたため、国内市場の形成が非常に未発達だったという共通の認識があった。しかし、近年の研究では、カタルーニャ産品を他のスペイン諸地域へ運搬する幹線道路沿いにあるカタルーニャのいくつかの小規模な山村の住人が、陸路での運送業者として活躍しただけでなく、スペイン各地の都市に広く定住して、カタルーニャ産品の販売とカタルーニャ向けの食料や原材料の買付け搬送を行なう商人として重要な役割を果たしていたことが明らかになってきた（産業集積ともなう補助産業の生成）。その行動様式は、いわゆる交易離散共同体*diàspora mercantil*と呼ばれるもので、ブルボン朝スペインで被支配民族となったカタルーニャ人は、「異国」の居住地で、言語、生活様式、信仰（彼らはムンサラットの黒いマリアを必ず持っていた！）などの文化的少数性ゆえに閉鎖的ネットワークを形成しそれを駆使していた。つまり、彼らは、スペイン統一後も「異邦人」として行動したのである³⁷。そして、彼らが扱った様々なカタルーニャ産品の中心をなしたのもこそ更紗であり、またバルサローナの捺染企業も、注文のほとんどをこれらのカタルーニャ商人から受けている。

彼らは、バルサローナの更紗捺染業者に対して注文を出す際に、各地の消費者の嗜好や流行を詳細に伝えている。また、例外的にカタルーニャ人ではないと思われるセビーリャのあ

る商人は、興味深いことに、18世紀末の最大の捺染企業ゴニマ社に密輸の更紗や捺染亜麻布の切れ端を送って、それを模して捺染するよう要求したり、さらに、これは拒否されるのだが、この商人の推薦するデザイン工を採用するようにとの要求すら出している³⁸。この点は、別稿で詳細に論じる予定である。

では、植民地はカタルーニャの工業化にとってまったく重要でなかったのだろうか。関税収入の増加を意図した1778年の「自由貿易」規則は、輸入品であっても、それがスペインで再加工されたものであれば、それを国産品と同じ関税で植民地へ輸出できるようにした。これによって、バルサローナの更紗捺染業者たちは、北西フランスやとりわけシュレージェンなどから輸入した白地亜麻布を捺染して植民地へ再輸出し始め、この捺染亜麻布(pintats/pintados)は、1782 - 1796年には全捺染活動の3割を占めた。これは、植民地でカタルーニャ産更紗より捺染亜麻布が好まれたためで、植民地からは「ここ(植民地)では、贅沢なことにもその気候ゆえに、人々は綿布ではなく、バルサローナの更紗企業がハンブルクや他の諸外国から購入し、捺染して再輸出してくる亜麻布を好みます」と報告されている。

だが、輸入亜麻布の捺染と再輸出がカタルーニャ綿業の工業化に与えた影響については大きく意見が分かれており、工業化を遅らせたという見解から、工業化に積極的に貢献したとする見解まである³⁹。いざれにせよ、18世紀末のヨーロッパの更紗捺染業のなかで、バルサローナのそれが最大級だったとするトムソンの見解は、亜麻布捺染のことを十分に考慮しておらず、この点からやや修正を迫られるかもしれない⁴⁰。

ただ、次の点は非常に重要であろう。北西ヨーロッパに輸出されていた葡萄蒸留酒は18世紀後半には植民地へも輸出され始め、植民地産綿花の購入費用を幾分か相殺していた。そして、実は、捺染亜麻布も植民地産綿花の購入費用に当てられていたのである⁴¹。この点も、別稿で論じる予定である。

* 本稿の執筆に至るまでには、エロイ・マルティン、ジュゼップ・M・デルガード、J・K・J・トムソン、アレックス・サンチェス、アシュンタ・ムゼット、ジャウマ・トラス、故市川孝正、草光俊雄、琴野孝、佐村明知、田澤耕、立石博高、中塚次郎、二宮宏之、原輝史、廣田功、湯沢威、等々、多くの先生方にお世話になった。ありうべき誤りは、当然筆者一人のものである。

1 ウォーラーステイン (1993), pp. 222-232.

2 Vilar (1966), pp. 10-11.

3 Vilar (1974), pp. 8-9.

- 4 DD. AA. (1985).
- 5 物産の文化的意味については、たとえば、川勝 (1987). 川北 (1986). 織物業の産業集積、地域的経営資源、業種転換能力については、たとえば、佐村 (1995), 奥野 (1999C).
- 6 作道 (1984), p. 105.
- 7 Berg (1998), pp. 385-393. 社会経済史学会第69回全国大会 (2000年10月21・22日、明治大学) では、バーグのこの論文名とほぼ同じ「東洋をつくる—17・18世紀ヨーロッパにおける東洋物産の産業化—」と題したパネル・ディスカッションが行われた。私は、そこでの草光氏の報告「シノワズリに染まる—捺染—」と、司会の川勝氏のコメントから非常に有益な示唆を得たことを記しておく。
- 8 川北 (1986), pp. 153-160.
- 9 Berg (1998). 川勝 (1987), pp. 192-197. 作道 (1984), pp. 94-95.
- 10 Berg (1998), pp. 385, 387, 390, 393-415. 川北 (1986), pp. 162-183. 川勝 (1987), pp. 192-198. なお、「プロダクトのイノベーション」「プロセスのイノベーション」という表現は、バーグから示唆を得た草光氏のものである。
- 11 Martín (1994), p. 51
- 12 深沢 (1985), pp. 1-8. Martin (1994), pp. 47-51.
- 13 Martin (1994), pp. 47-50. Thomson (1994), pp. 85-89.
- 14 Fontana (1956), pp. 205-210. Thomson (1994), pp. 71-73. Martín (1994), pp. 50-51.
- 15 Torras (1994), pp. 16-28, (1996), pp. 23-31.
- 16 深沢 (1986), pp. 29, 31-33. Thomson (1994), p. 69-71.
- 17 Martín (1994), pp. 48, 52. Thomson (1994), pp. 58-64, 71.
- 18 Martín (1994), pp. 53-54.
- 19 Thomson (1994), pp. 92, 94. 川北 (1986), pp. 174-184. 深沢 (1985), p. 6. 作道 (1984), pp. 94-95.
- 20 川北 (1986), pp. 179-184. 川勝 (1987), pp. 197. また、フランスでも、18世紀前半更紗は密輸されただけでなく密造されている。作道 (1984), p. 95.
- 21 琴野 (1992), pp. 3-4. 坂巻 (1976), 服部 (1968), p. 73. 佐村 (1995), pp. 5-9. Woronoff (1998), pp. 79-80.
- 22 公衆衛生政策を装った保護主義政策が採られた背景の一つには、スペイン継承戦争の終結のために結ばれたユトレヒト条約が、イギリスとフランスの産品に高率関税を課すことをスペインに禁じていたことがあると考えられる。Thomson (1994), pp. 89-95. (1995). 特に公衆衛生政策につ

- いては, Martín (1994), pp. 55-57.
- 23 深沢 (1985), p. 7, 13.
- 24 Martín (1994), 58-61. スペインは綿糸の購入を保証する代わりに、マルタにスペイン以外のヨーロッパ諸勢力からの独立、スペイン産小麦の輸入を求めた。一方マルタは、綿糸の輸出でスペインから銀貨を得て財政の立て直しを図った。
- 25 Martín (1994), pp. 52-53, 66-67. 織物小売商については特に, Vilar (1964), IV. Thomson (1994), pp.129-153. Sánchez (1989), p. 70.
- 26 Martín (1994), pp. 67-68.
- 27 Thomson (1994), pp. 73-84.
- 28 Sánchez (1989), pp. 67-68. Thomson, (1994), pp. 109-114. 捺染工程が一般的に集中作業所化することについては, Chapman (1974), pp. 458-464. Woronoff, p. 94. 企業家の問屋制（原料前渡の外注、中間組織）と集中作業所（内製、内部組織）の選択については、斎藤 (1985), pp. 263-267. 佐村 (1985), p. 15.
- 29 Martín (1994), pp. 56-65, 68-69. Thomson (1994), pp. 85-88, 109-112. 深沢 (1985), p. 7-9, 14
- 30 Martín (1994), pp. 64-66.
- 31 Thomson (1994), 171-182, 196-198, 221-223. Sánchez (1989), p.76, 78.
- 32 Okuno (1999A), 奥野 (1999B), (1999C). 「集合工場」とは、一つの都市を中心に周辺地域に生産拠点が散在し、その中央の都市によって生産のネットワークが組織されている状態について、フレデリック・ル・プレイが用いた表現。ピオリ・セープル (1993), p. 42.
- 33 深沢 (1985), p. 14,17. 川勝 (1987), p. 210.
- 34 奥野 (1999B), p. 8.
- 35 Thomson (1994), pp. 154-164, 203-204.
- 36 例えば、BC (Biblioteca de Catalunya), AJC (Arxiu Junta de Comerç), llig. 53, caixa 29, folis, 1-21, informe dels directors de la Companyia de Filats de Barcelona, 15 de desembre de 1784, i llig. 51, caixa 12, folis 7-14, informe de Junta de Comerç de Barcelona, 13 de marc de 1783.
- 37 奥野 (1999B), p. 8-9.
- 38 ANC (Arxiu Nacional de Catalunya), Fons Castanyer, Llibre mayor de Josep Castanyer, 1781-1808. BC, FG (Fons Gònima), cartes rebudes i copiador de cartes d' Erasme de Gònima. なお、製造業者と商人の関係については、イギリスの毛織物業についてであるが、草光氏のすばらしい論文がある。草光 (1988).

- 39 奥野 (1999B), 立石 (1989). 引用史料は、BC, AJC, llig. 32, caixa 45. discurs pronunciat a la Junta General de Comerciants matriculats de la ciutat de Barcelona, 11 de desembre de 1786. この時期、シュレーゲンからスペインへの亜麻布輸出は急増している。馬場 (1993), pp. 102-103. フランスのスペインへの亜麻織物輸出については、服部 (1992), pp. 188-201. 西領アメリカ植民地の住人の織物消費に関しては、密輸品を中心とする外国産品が氾濫していたため、クリオーリョやメスティースはブルターニュ織り (亜麻織物) を中心とするフランス趣味が強かったこと、西インド諸島の奴隷にはイギリス産やフランス産の粗質綿織物が使われたこと、先住民は伝統的の衣装を用い続けていたことなども考慮しなくてはならない。Delgado (1995), pp. 23-27. ところで、捺染亜麻布はカタルーニャ語とカスティーリャ語でそれぞれ pintats, pintados と呼ばれたが、ポルトガル語の pintadoes は、英語の chintz と同様、インド更紗に与えられた初期の呼称であった。いずれも「斑点」が原義。深沢 (1986), p. 21.
- 40 Thomson, (1995).
- 41 BC, FG, Carta de la Companyia de Filats a Salvador Campillonch i Guarro de Mataró, 17 de juny de 1786, Copiador de cartes, L. 17.

引用文献

- 馬場哲 (1993), 「ドイツ農村工業史—プロト工業化・地域・市場」東京大学出版会。
- Berg, Maxine (1998), "Manufacturing the Orient. Asian Commodities and European Industry 1500-1800", *Proceeding of the Instituto Internazionale di Storia Economica "F. Datini"*, 29, Prato, pp. 385-419.
- Chapman, Stanley D. (1974), "The Textile Factory Before Arkwright : A Typology of Factory Development", *Business History Review*, XLVIII, pp. 451-478.
- DD.AA. (1985), *Catalunya, la fàbrica d'Espanya. Un segle d'industrialització catalana (1833-1936)*, Barcelona.
- Delgado Ribas, Josep M. (1995), "Mercado interno versus mercado colonial en la primera industrialización española", *Revista de Historia Económica*, 8-1, pp. 11-13.
- Fontana Làzaro, Josep (1956), "Sobre el comercio exterior de Barcelona en la segunda mitad del siglo XVII", *Estudios de Historia Moderna*, 5, pp. 199-219.
- 深沢克己 (1985), 「レヴァント貿易と綿布—18世紀マルセイユ商業史序説—」『土地制度史学』第109号、1-18頁。
- (1986), 「レヴァント更紗とアルメニア商人—捺染技術の伝播と東西貿易」『土地制度史学』第

111号、18 - 37頁。

服部春彦 (1968), 『フランス産業革命論』 未来社。

—— (1992), 『フランス近代貿易の生成と展開』 ミネルヴァ書房。

川勝平太 (1987), 「イギリス産業革命とインドーインド木綿の西方伝播—」『最初の工業国家を見る目』 早稲田大学出版部、179-221頁。

川北稔 (1986), 『洒落者たちのイギリス史』 平凡社。

草光俊雄 (1988), 「何か目新しいものを送られたし—ロンドン商人と英国北部の製造業者」『社会経済史学』 第54巻第3号、66-85頁。

琴野孝 (1992), 『イギリス産業革命史研究』 鳳書房 (第3版)。

Martín Corrales, Eloy (1994), "La importación de telas de algodón levantino y los inicios del estampado en Cataluña", *Revista de Historia Industrial*, 6, pp. 47-73.

Okuno, Yoshitomo (1999A), "Entre la llana i el coló. Una nota sobre l'extensió de la indústria de cotó als pobles catalans el darrer quart del segle XVIII", *Recerques*, 38, pp. 47-76.

奥野良知 (1999B), 「カタルーニャ経済史研究の動向—18世紀を中心に—」スペイン史学会『会報』 第59号、6-11頁。

—— (1999C), 「毛から綿へ—カタルーニャ農村部への綿業の拡大に関する一考察 (1779-1806年)—」『スペイン史研究』 第13号、1-21頁。

ピオリ, M. J.・セーブル, C. F. (1993), 『第二の産業分水嶺』 築摩書房。

斎藤修 (1985), 『プロト工業化の時代』 日本評論社。

坂巻清 (1976), 「ランカシャー綿業の成立—遺産目録分析を中心に—」, 研究年報『経済学』 (東北大学) 第120号、25-55頁。

作道潤 (1984), 「プロト工業化期のフランスにおける綿布捺染業」、神戸大学経済史研究室編『ヨーロッパの展開における生活と経済』 見洋書房、91-112頁。

佐村明知 (1995), 「工業化の地域的要因に関する一考察—フランスノール地方を中心に—」『大阪大学経済学』 第44巻第3・4号、1-20頁。

Sánchez Suárez, Àlex (1989), "La era de la manufactura algodoneria en Barcelona, 1736-1839", *Estudios de Historia Social*, 48-49, pp. 65-113.

立石博高 (1989), 「『自由貿易』規則 (1788年) とスペイン経済」『地中海論集』 第12号、63-71頁。

Thomson, James K. J. (1994), *Els orígens de la industrialització a Catalunya. El cotó a Barcelona 1728-1832*, Barcelona.

- (1995), "Intervención del Estado en la industria catalana de estampado de telas en el siglo XVIII", dins M. Berg (ed.), *Mercados y manufacturas en Europa*, Barcelona, pp. 74-110.
- Torras Elías, Jaume (1994), "L' economia catalana abans del 1800. Un esquema", dins *Història econòmica de la Catalunya contemporània*, vol. 1, Barcelona, pp. 15-38.
- (1997), "Productes vitícoles i integració mercantil a Europa, ss. XVI-XVIII. Una Panoràmica", *Estudis d'Història Econòmica*, 14, pp. 23-33.
- Vilar, Pierre (1966), *Catalunya dins l' Espanya moderna*, 4 vol., Barcelona.
- (1974), "La Catalunya industrial : Reflexions sobre una arrencada i sobre un destí", *Recerques*, 3, pp. 7-22.
- ウォーラーステイン, I. (1993), 『近代世界システム1600 - 1750』名古屋大学出版会。
- Woronoff, Denis (1988), *Histoire de l' industrie en France du XVIe siècle à nos jours*, Paris.